

【鵜匠家の一年】

長良川の鵜匠は、5か月の出漁期を中心とする決まったスケジュールに従い1年を過ごす。漁師、鵜、そして器具はすべて、150日にわたる連夜の過酷な労働のため、万全の準備をしなければならない。1年のうち、出漁期以外の期間は、漁の準備に費される。

5月11日：シーズン初日

鵜に入念な健康診断を実施し、鵜の体調が良いことを確認する。鵜匠は、漁師の安全と豊漁を祈願する神道の式典に参加する。その夜、漁が始まる。

7月16日：長良川まつり

この祭事は、夏の訪れと長良川の舟遊びシーズンの開幕を意味する。鵜匠は鮎供養の儀式に参加し、川に魚を放つ。川には2艘の舟が浮かべられる。一艘は鳥居形の白いちょうちんで飾られ、もう一艘には、三重の塔の輪郭を表す赤いちょうちんが乗せられている。船に乗り込んだ祭司が、再び安全と豊漁の祈りを捧げる。花火が空一面を彩る。夜間の漁が終わると、鵜匠は他の船員とともに最後の祈とうを行う。

中秋の名月

この日は鵜匠にとって、出漁期で唯一の休日である。旧来の太陰暦では、鵜飼休みは8月15日と決められていたが、現在は、中秋の名月（秋分に最も近い時期の満月）に合わせて日付が変わる。この日、鵜匠は漁をする代わりに長良若宮八幡宮の祭事に出席し、八幡神に酒と鮎を提供する。鵜にとっては、待ちに待った休日の夜である。

10月15日：シーズン最終日

晩秋の風が吹く中、鵜舟がシーズン最後の夜の漁に向かう。観客は掛け声をかけ、花火があがる中、鵜舟を見送る。ビデオには、「さようなら来年もどうぞ」と炎で書かれたメッセージが映っている。10月15日以降の最初の日曜日には、死去した鵜のための法要が行われる。漁師と住民は必死に働いた鵜に感謝し、追悼の俳句を書いた短冊を長良川に投げ入れる。

冬の数か月、シーズンオフ

11月下旬～12月には、茨城県より、新たに捕獲された鵜（シントリ）が届く。冬の数か月の間、新しい鵜は紐に繋がれながら泳ぎに慣れるとともに、仕事の仕方を学ぶ。この時期、鵜と鵜匠がトレーニングを行う様子は、川岸でよく見られる光景である。鵜匠はまた、来シーズンに向けた器具と物資の調達で忙しい。燃料を確保するため、何百という松の丸太を割らなくてはならない。そして、新

しい藁のスカート（腰蓑）と藁の草履（足半）を手で織らなければならない。また、鵜匠家では、長良川の由緒ある郷土料理、鮎寿司（塩漬けにした鮎と米を木製の桶で発酵させて作られる）が用意される。